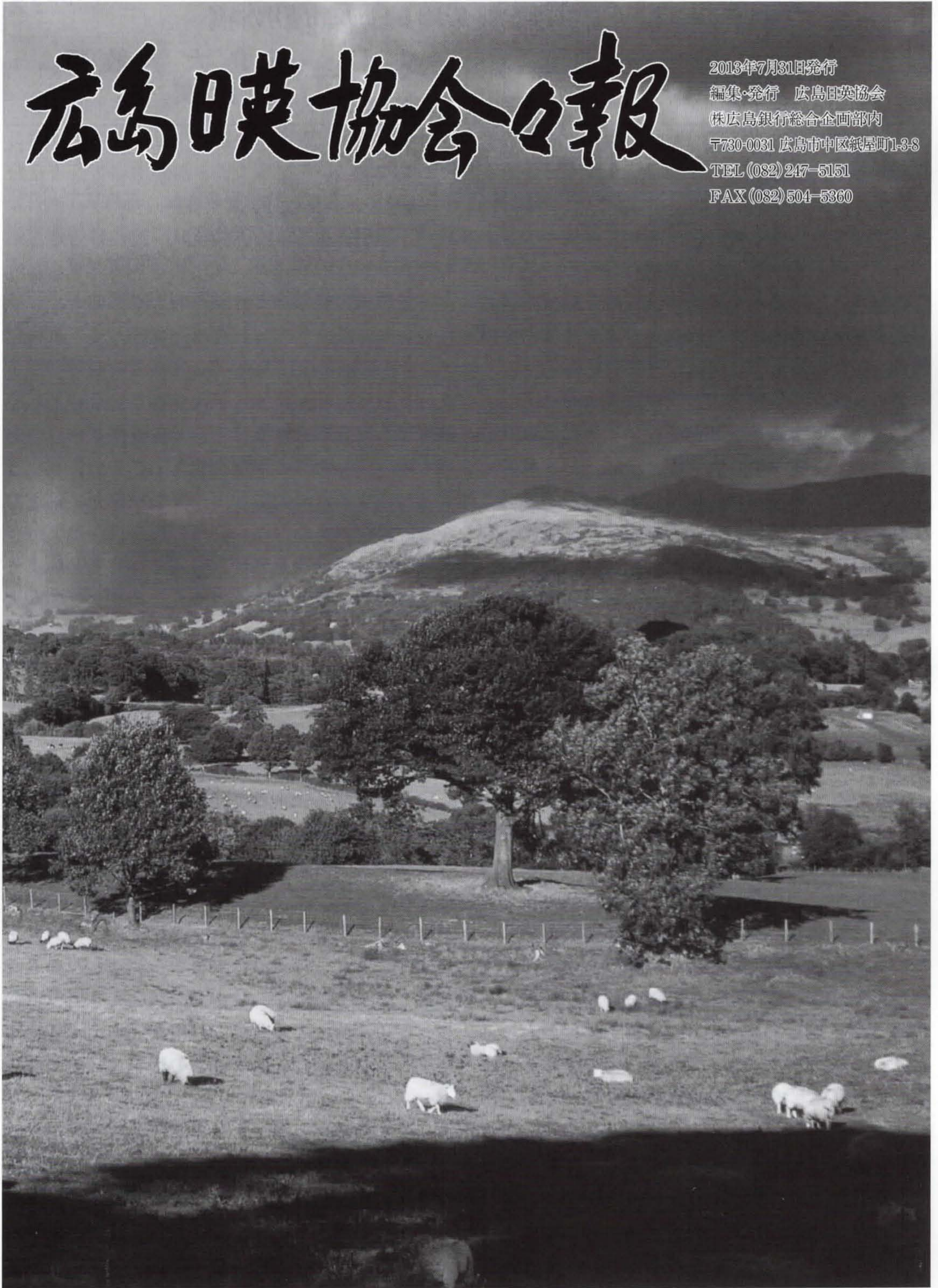


THE JAPAN-BRITISH SOCIETY OF HIROSHIMA QUARTERLY No.99

広島日英協会報

2013年7月31日発行
編集・発行 広島日英協会
株広島銀行総合企画部内
〒730-0031 広島市中区紙屋町1-3-8
TEL (082) 247-5151
FAX (082) 504-5360



▲The Coniston Fells, Lake District National Park, Cumbria

Cambridge大学Trinity College訪問記

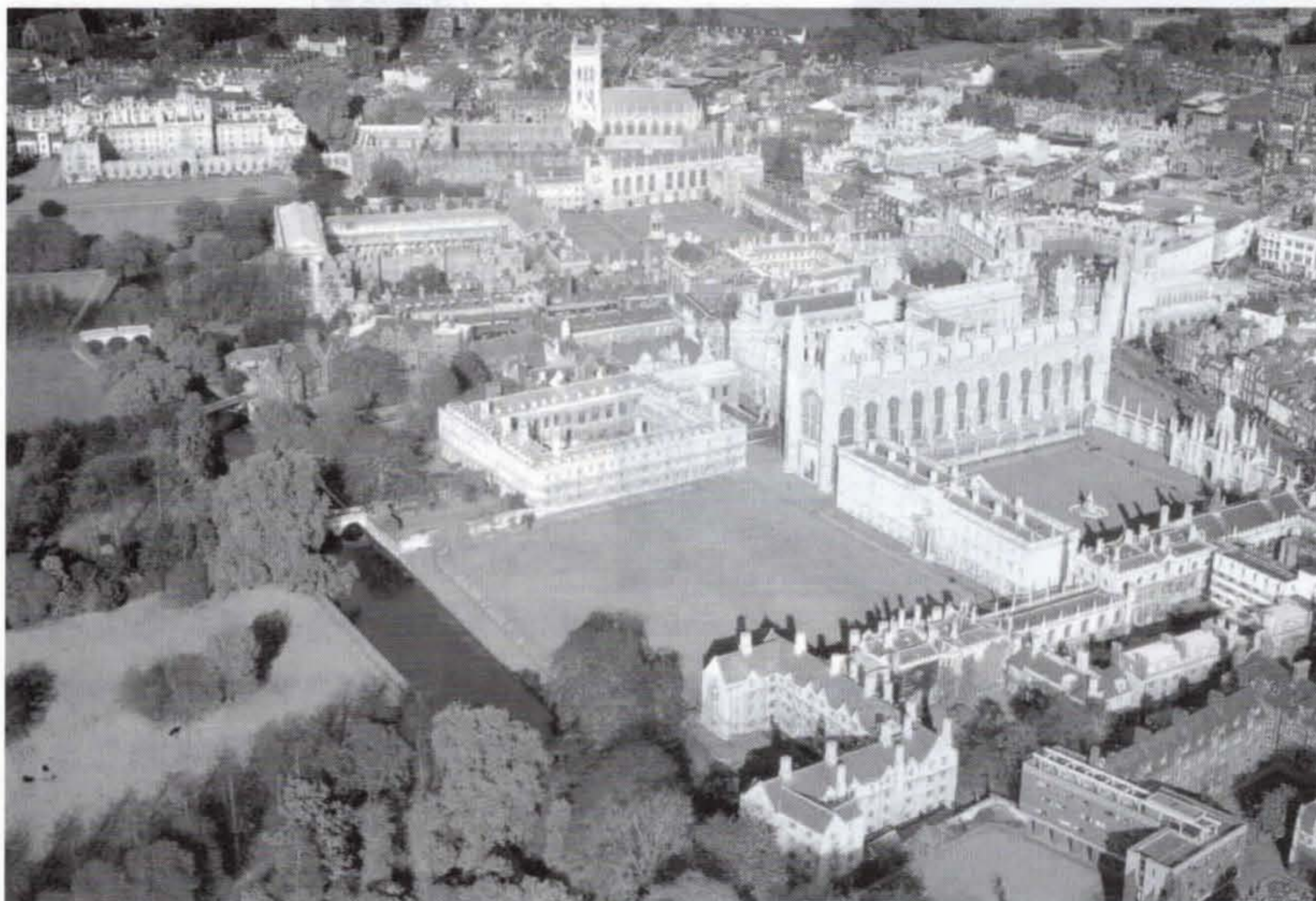
関西外国語大学教授
菊池 繁夫

私が英国のCambridge（ケンブリッジ）大学Trinity College（トリニティ・コレッジ）での学会に参加したのは1996年9月であるから、もう17年も昔のことである。

学会のタイトルはLinguistics and Literary History : A Conference on Literary Style and Language Change（言語学と文学史：文学の文体と言語変化）というもので、主催者はCambridge大学英語科のSylvia Adamson（シルヴィア・アダムソン）博士、同Trinity CollegeのSimon Alderson（サイモン・オルダーソン）博士、そして同じくTrinity College所属のJoe Bray（ジョウ・ブレイ）博士であった。日本人発表者としては豊田昌倫氏（^{まさのり}京都大学教授）、山口美知代氏（京都府立大学助教授）そして私（大阪国際女子大学教授）であった（所属は当時）。他にはJames Joyce研究で高名なDerek Attridge氏。氏は当時は米国のRutgers大学におられ、この学会の2年後に英国York大学に移られた。そして米国Cornell大学の古典語のFrederick Ahl氏等がいた。発表はされなかったが、広島大学（1983-1985）から東京大学に移られていたGeorge Hughes氏もおられ、彼はSylvia Adamson博士の発表にいろいろと質問をして批判を加えていた。

その時の体験をもとに、このOxford（オックスフォード）大学と並ぶ英国の名門大学を紹介してみたい。

まずCambridge大学の中心地の写真をお見せしたい。下の写真は上が北、下が南である。中央にあるのが有名なKing's Collegeでその向う側にTrinity Collegeがある。写真中央より少し上、真ん中に噴水のある四角い広場を持った一角があるが、そこがTrinity Collegeである。

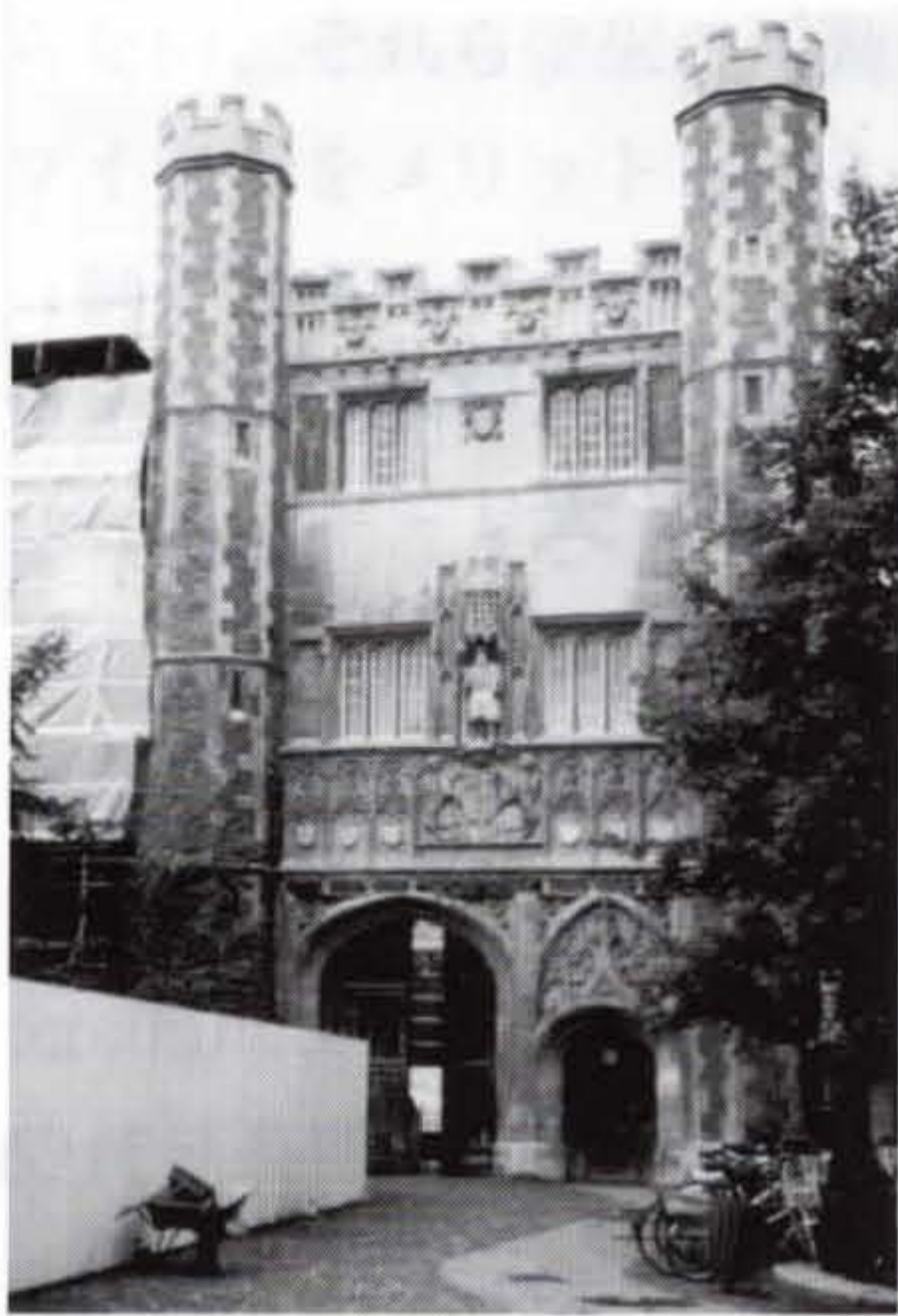


Cambridge大学中心部

この両Collegeの左手がCollegeの後方になるが、River Cam（ケム川）が縦に流れ、さらに左手に緑の空間が広がっている。ここがthe Backsと呼ばれる広大な緑地帯で、ジョギングの好きな人達はここを走る。ここを越えてもう少し行くと大学図書館がある。

さてTrinity Collegeであるが、構成人員としてはMasterと呼ばれる一人のCollege長、教育に従事している160名のフェロー、320

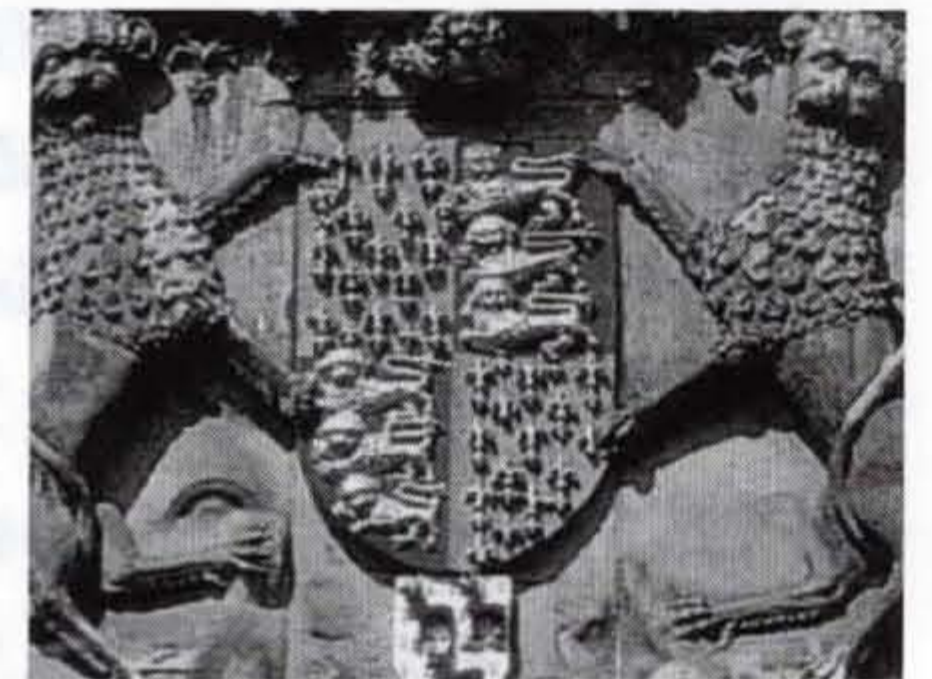
名の大学院生、そして650名の学部生がいて、Cambridge大学の中で最も大きなcollegeである。その正面を見てみよう。正面入り口はthe Great Gateと呼ばれ、中央に小さく見えるのが、1546年にこのCollegeを作ったHenry VIII（ヘンリー8世）（1491-1547、1509年より没年まで英国王）で、手にsceptreと



The Great Gate (正門)

呼ばれる錫杖を持っている。が、実際には手にしているのは椅子の脚でいつの時代か学部がいたずらをしてそのままにしてあるのだという。その下には、Trinity Collegeの前身の二つのcollegesのうちの一つであるKing's Hallの寄進者であるEdward III (エドワード3世) (1312-1377、1327年より没年まで英国王) のthe coat of arms (紋章) が付いている。入り口には守衛 (a porter) がいて、その詰め所をthe Porters' Lodgeという。私は宿泊先のBlue Boar Courtの部屋の鍵をここで受け取った。

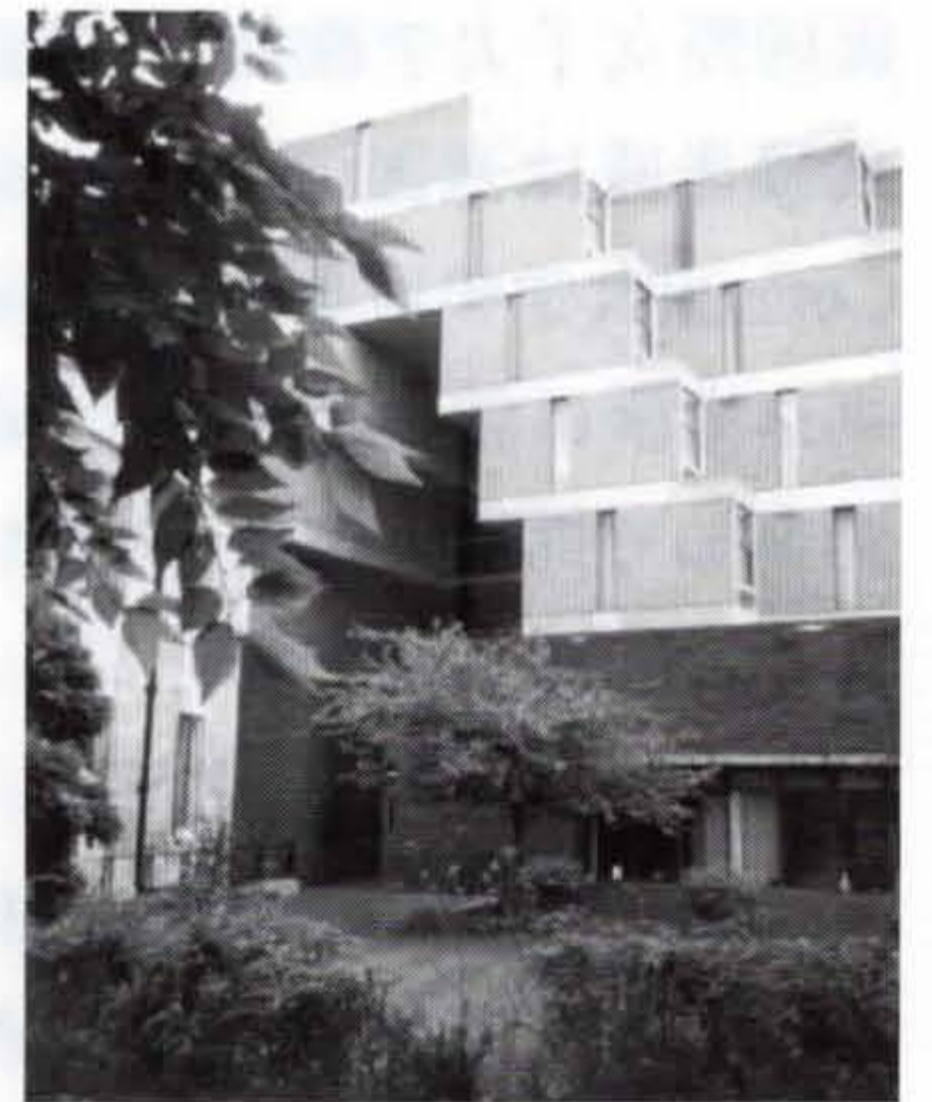
Collegeの中に入る前に私の宿泊したBlue Boar Courtを紹介したい。Trinity Collegeの前にあるTrinity Streetと呼ばれる道路を挟んで向かい側にある。右の写真が、その正面



The Coat of Arms (紋章)

で、次の写真が提供された部屋である。ここは学会関係者が宿泊できる建物で、近くまで行ったが場所が分からず、前の空き地にいた物売りの女性に訊いて教えてもらった。この学会のためにここに宿泊していたオーストリアの学者Walter Bernhart (Graz大学) 氏が、クレジットカードを使って1階の電話で国際電話をかけようとして入れたカードが戻って来ないと慌てていた。今は電話も新しいものに替っているのであろうか。

さてthe Great Gateを入るとthe Great Courtと呼ばれる、真ん中に噴水のある中庭に出る。先の俯瞰写真では右から左手に進み中心に噴水のある広場に出ることになる。ここは、映画のChariots of Fire (邦題『炎のランナー』(1981)) でthe Trinity Great Court Runと呼ばれる内周を走る競争が行われた場所として有名である。もっとも、実際の撮影は、Cambridge大学の拒否によりEton (イートン) 校で行われたようである。



Blue Boar Court (学会宿舍)



The Great Court

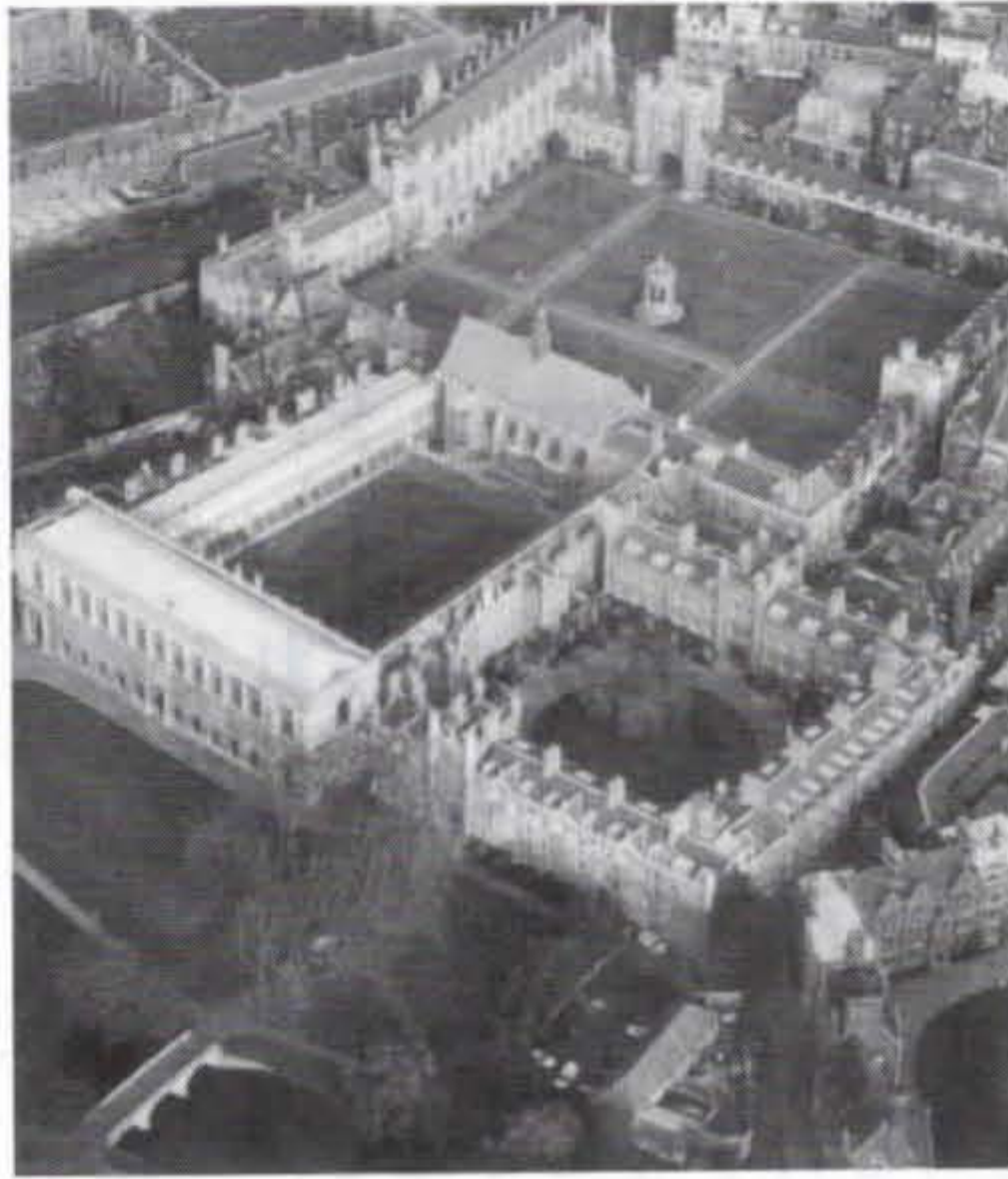
このthe Great Courtを横切ると正面にthe Hallと呼ばれる建物がある。ここに入ると右手にthe Dining Hall、左手を上ると我々のミニ学会の会場となる。まず会場の方をお示しすると下のような宴会場のようなところで隅にピアノが置いてある。このピアノにかかっているカバーがひっくり返ったワインの跡があちこちにある年代を感じさせるものであった。

この会場の方に進まないで、the Hallの入り口を右手に入ると食堂がある。次の写真の屋根の上に小さい塔のある建物 (the Hall) がこの食堂の位置にあたる。



学会会場

まず正面にはHenry VIIIの肖像画がかかっている、その前がHigh Tableの位置である。映画『ハリー・ポッター』の食堂を思い浮かべると、大体あのような形であるが、こちらの方が、成立年代を反映して質素である。天井の湾曲した梁がこの建物の特徴である。



Trinity College

左右の壁にはこのTrinity Collegeの著名な人物達の肖像画がかかっている。右手の壁には、まず、CollegeのMaster (service 1593-1615)であったThomas Nevile (トマス・ネヴィル)で、彼がこのCollegeを今の姿にした。続いてElizabeth (エリザベス)女王の寵愛を受けたthe Earl of Essex (エセックス伯爵) (1566-1601)、政治家で哲学者のFrancis Bacon (フランシス・ベイコン) (1561-1626)、物理学者で数学者のSir Isaac Newton (1642-1727) (アイザック・ニュートン卿)、



The Hall (食堂)

そして詩人のJohn Dryden (1631-1700) (ジョン・ドライデン)と桂冠詩人のAlfred Lord Tennyson (1809-1892) (アルフレッド・テニソン男爵)が並ぶ。左手の壁には物理学者のLord Rutherford (ラザフォード男爵) (1871-1937)とこのCollegeのMaster達が並ぶ。

この食堂を右手に、発表会場を左手に見て、まっすぐ進むと奥のcloister (回廊)に囲まれた広場であるNevile's Courtに出る。ここは上に述べたThomas Nevileが私財を投じて整備した所で、この広場の向う正面に有名なthe Wren Library (レン・ライブラリー)がある。ここはOxfordのthe Bodleian Library (ボウドリアン・ライブラリー)と並び、貴重本を多数所蔵している。このライブラリー自体は回廊の上の階にある。所蔵されている重要な文献としては「8世紀の聖パウロ書簡」、John Milton (ジョン・ミルトン)の短詩の手稿、Newton (ニュートン)の自身による書き込みのある*Principia*初版本、*Winnie-the-Pooh*の手稿がある。ここを抜けると、次の写真にあるようにCam (ケム)川に面した裏側に出る。といっても、こちらからライブラリーに入ることもできるので裏というのは正確ではない。このCam川を上、上の全体写真の左下にある橋を越えていくと、先に述べたthe Backsと呼ばれる広大な緑の広場に出る。



The Wren Library (レン・ライブラリー)



The Wren Library (レン・ライブラリー)

さて、私の参加したconferenceについて述べると、主催者としてはAdamson博士が発表されており、タイトルは‘Styles of Metamorphosis : Varying Forms and Changing Values in Elizabethan and Modernist Poetry’、重鎮のDerek Attridge教授は‘Language, Sexuality and Philology : Joyce’s New Beginning in A Portrait of the Artist as a Young Man’ と題する発表を行った。日本人発表者は、豊田昌倫氏が‘A Change in the Language of Faith : *Bring a charge* and Similar Constructions’、山口美知代氏が‘The Translatio of English Free Indirect Discourse into Japanese : Diachronic Change in Stylistic Preferences over Last 100 Years’、私が‘Poe Rises from the Back of History’を、それぞれ発表した。

2日目の夜にconference dinnerと呼ばれる晩餐会が行われた。場所はR Great Courtと呼ばれる部屋で、別名the Private Supply Roomと呼ばれる部屋である。位置的にはthe Porters’ Lodgeから見てはすかいにthe Great Courtを横切った隅のところにある。テーブルのヘッドに座っているのは、この小さな学会の主催者の一人であるSimon Alderson博士、その向かって右横が私、その隣が発表者の一人の豊田昌倫氏である。こういった類のディナーはCambridgeのような伝統ある大学ならではで、私はその雰囲気を堪能した。



Conference dinner

文学であれ文体論であれ、英文学のテキストのアカデミックな研究はCambridgeやOxfordのような環境でこそ可能であって、日本のような英文学の環境から遠く離れた国にあってはなかなか難しい。ただ日本の研究者は、この風土の異なる地にあって、涙ぐましい努力をして研究に励んでいるのである。

その後の主催者達のプロフィールを短く書いてこの稿を終わりとしたい。Simon Alderson博士は、Trinity Collegeを去られた後、英国のいわゆるa new universityで教鞭をとられることを望まず、名門のHong Kong大学へ1997年に移られた。現在はHonorary Professorとなっておられる。Sylvia Adamson博士は、1999年にManchester大学にProfessor of Linguistics and Literary Historyとして移られ、その後2004年にSheffield大学にProfessor of Renaissance Studiesとして移られた。現在はSheffield大学のEmeritus Professor of Renaissance Englishで、またPresident of the Philological Societyでもある。Joe Bray博士はAdamson教授と同じくSheffield大学のSchool of English Literature, Language and Linguisticsで教鞭を取っている。私の現職場にJ. H. M. Webbという教授がおられるが、その方はOxford大学でサンスクリット語を学ばれた方である。サンスクリット語を学ぶ学生達は就職のことを考えなかったのかと問うたことがある。Webb教授曰く、自分達はアカデミックだったので、だれも将来の就職のことなど考えていなかった、とのこと。上の3人の主催者達も学問を追及して意気軒昂であった。

(註 今回、この原稿を書くにあたってTrinity CollegeからCollegeのパンフレットに所収の写真を使用することを許可していただいた。謝辞を述べたい。他のものはconferenceの時に私が直接撮ったものである。)